

2014.2.1 12:30

## 大学入試は外注ブーム？ 学校間で共有、過去問題「リサイクル」も…

受験シーズンを迎えた私立大学。「大学の顔。どんな学生が欲しいのかが分かる」といわれる入試問題だが、近年は独自に作成せず、外注する大学が増えている。文部科学省の調査では、平成19年度に予備校などに外注したのは私大71校だったが、昨春は公立1校を含む98校に増加。私大では6校に1校は問題を外注している計算だ。入試の多様化などで問題を作成する教員の負担増加が背景にあるという。

### 教員に負担大きく

昨年は一般入試で約10万人が志願した近畿大で、問題作成を所管する入学センターの大宮淳史事務長は「近大は今後も自前の問題作成を続ける方針だが、大学によっては業務負担に耐えられないところもあるのではないかと話す。

近大の場合、出題委員には180人の教員を配置。12日間の入試期間に備え、100種類を超える試験問題を用意する。

問題作成を始めるのは前年4月。教科ごとにグループをつくり、問題を作成するが、難問や奇問を避けるだけでなく、平均点が中央値になるように難易度を調整するのも難しい。過去問との重複やミスをチェックするなど作業量は膨大だ。

### 文科省「慎重対応を」

多くの大学が問題作成を予備校などに依存している現状に、文科省は19年度に通達を出し「慎重な対応」を求めている。機密性や公平性を保つ必要があるためだ。

同省の担当者は「大学のアドミッションポリシー（入学者受け入れ方針）に基づき学内で作成してほしい」と強調するが、関係者からは「小規模校では、多様な科目の問題作成ができる教員がそろっていない」という声もあがる。

作問を請け負っているのは、予備校や教育関連企業だが、実は大手予備校は作問から一線を引いている。

河合塾は「良問とは思えない出題が続いて批判が起き、大学から要望が相次いだ」として15年ほど前に作問を始めたが、数年で取りやめた。「授業を行う講師が作問することもあり、漏洩（ろうえい）などの問題が起こる前に中止した」という。

駿台予備学校も「系列の高校や大学を持っており、受験生に疑念を持たせかねない」と請け負ったことはないという。

### 労力軽減にあの手この手

自前の問題作成をしている大学も、作問の労力を軽減しようという取り組みをはじめている。他大学の過去問を“再利用”しようという動きだ。

岐阜大を中心に18年に結成されたネットワーク「入試過去問題活用宣言」には、20年度入試から70の国公立大が参加。今年1月時点で107大学が参加している。

参加大学は別の参加大学の過去問題をそのまま、または一部改変して利用できる。岐阜大入試課の担当者は「過去問を共有財産と捉え、年間十数校がその大学のアドミッションポリシーに合った問題を利用している」と話している。